

日野誕生院

やがて住職に別れを告げ、薬師堂の脇にあるゲートを開いて、西本願寺が経営する保育園の運動場に入り、親鸞の「産湯の井戸」と、胞衣(えな)といって胎児を包む膜と胎盤を埋めた親鸞の「胞衣塚」に向う。運動場の端に一段高くこしらえた50坪もあるうかと思われる台地があり、その台地に水の枯渴した井戸と石を乗せた小さな塚がある。親鸞の誕生の時、この井戸の水を産湯として使い、胞衣をこの地に埋めたと伝えられている。

運動場を横断して誕生院への道に出る。そしてすぐ背後の石垣に斜めにつけられた石段を登ると、そこが親鸞が誕生したのを記念して建てられた誕生院の本堂である。

本堂わきの寺域に親鸞6歳の童形の銅像が立っている。可愛らしい顔立ちの像である。この童顔の親鸞が8歳の時、頼政の反逆があった。大津から逃れる以仁王、頼政、それを追跡する平家のおびただしい軍勢。親鸞はこの地であって、甲冑に身を包んだ人間と人間の闘いを目撃した。そればかりか、あるいはその敗軍の中に父の姿があったかもしれない。

法然や日蓮の生まれた近くにも、誕生院とか誕生寺とかいった寺院が建てられている。どちらも大変古い歴史のある建物であるが、この日野の誕生院の創立は比較的新しい。江戸時代後期の文政年間に西本願寺の19世本如の時、日野家の墓所のあるこの地に堂宇を建てようと思い、次の広如の時にできた堂に、親鸞の父の名をとって有範堂と名づけたのに創まる。

その後、明治13年、21世明如の時、約1000坪の敷地を手に入れ、開宗700年を記念して有範堂を改造することに決め、昭和6年に落成して名を日野誕生院と改めたのである。瓦葺の本堂と回廊は全て素木(しらき)の檜造りである。そして、柱

は中央が膨らんでいるエンタシスで、また前面7間中央厨子に立像であるご本尊の阿弥陀如来、両脇に親鸞幼童の御影と父有範の木像が安置されているそうだ。建物は昭和の初めのもので比較的新しいせいか、清楚で大変シンプルのように見える。

法界寺、平等院のご本尊は丈六の座像である。これに対して浄土真宗のご本尊は「お立ち向かいのお姿」といわれて、一般に立像である。『観無量寿経』に説かれた韋提希夫人(いだいけぶにん)の前に立たれた阿弥陀如来の相を表したものである。苦悩する衆生を見てじっとしていられず、「必ず救うぞ」「落としはしないぞ」と、前方に立ち上がって迎える姿である。

この本堂裏手の道から少し東に寄った所に、こんもりとした茂みの中に日野家の墓所がある。奥の一段高い所に玉垣に囲まれ、幾つかの墓石が並んでいる。そのうちで一番大きい五輪塔が親鸞の父有範の墓といわれている。また、母の吉光女、伯父範綱、そして親鸞の末娘の覚信尼の墓もこの墓地にあるそうだが、どの石碑が誰の墓標かはちょっと見ただけではよく判らない。

その墓地から離れ、山道を登って行くと15分ほどの所に「長明方丈石」と刻された笠型の石碑が建っている。このあたりが鴨長明が草庵を結び、『方丈記』を書いたところである。親鸞と長明とは20歳の年齢差がある。が、法名から察すると、長明は法然のもとで出家したかもしれない。ならば、吉水で親鸞と言葉を交わしていたかもしれない。(新妻久郎)